

景観アセスメントと認知心理

高 木 敬 雄

(受付 2003 年 5 月 12 日)

Summary

For us, landscape cognition represents not a domain of inquiry within cognitive psychology but an approach or set of assumptions guiding research in a variety of psychological substantive domains.

Here I will illustrate the approach with reference to recent literatures in various subareas of psychology of cognition. The landscape assessment deals with four fundamental factors, that is, (1) historical, cultural, and traditional, (2) social, (3) natural, and (4) personal (Kansei).

A definition of landscape assessment was presented as a triangle theory of landscape. In this report, some problems were discussed. For instance, visual psychology, Gestalt psychology, picture perception, methods of landscape assessment.

1-1. 景観の定義と認知心理学

景観とは、人間をとりまく環境そのものであり、それぞれの人間生活の場を通じ、時間と空間との交錯の中で、得られる連続的な経験であって、どこへ行こうとも、見たり感じたり、人の心に映ずる空間であると定義されているこの定義は、「北山正文編著、2002、実践のための環境アセスメントの手法、日刊工業新聞社」に基づくものであるが、「広島県環境計画協会」の会員による研究成果であって、この著作は、経験的に培われてきたものであって、本物のアセスメント手法を語ることが主眼となっている。そこには、具体的指針がある。したがって、この実践手法の課題にどの程度応え得ているかという批判もまた期待されているが、研究に参加した一会員としての対応研究に引きつけられてきたという実感がある。この著作の特色から見て、景観アセスメントに係わる「事実」や「概念」をめぐるいろいろな議論があるものと予想される。その議論こそが、科学技術の進歩としての環境質の測定項目の増加に対応できるものだと思われる。例えば、「空間」か「環境」か「場所」という視点からの景観認知が問題であるという指摘は、人文科学分野からの見解として興味深いものがある（山下清美、1997 景観認知と場所の意味 専修大学人文科学年報 第27号 17-31）。

では、認知心理学とは何か。その史的展開は人類とともに古く、景観美は宮島やアクロポリスの神殿など世界各地に見い出すことができ、これらの議論は数限りなくある。認知心理

学をめぐる定義もさることながら、研究分野についての記述を基にすることが妥当であろう。日本認知心理学会の専門分野（2003年度）は、2つに分類されている。専門区分 A は伝統的な系統のものであり、専門区分 B は認知的アプローチの最前線ということになる。認知心理学の統一理論派は区分 A に帰属し、アドバンス・コースが区分 B に帰属していて、「認知心理学」と「認知の心理学」の2分類に相当するものと考えてよいと思う。

専門区分 A：心理学的過程による区分—知覚，理解，思考・意思決定，言語，注意，感情，運動・行為，社会，発達，その他。

専門区分 B：関心のあるフィールドについての区分—理論・実験・モデリング，神経心理臨床，組織・経営，社会的ケア（災害，犯罪），感性認知・感性工学，経営工学・デザイン，バリアフリー・ユニバーサルデザイン（障害・高齢者），産業・交通，医療・看護，巨大システム，異文化間交流，各種測定，教育，美学・音楽・文学，法廷・目撃証言，その他

さて、環境評価に係わる実績と経験が盛り込まれた上述の実践手法書には、早くから景観問題を取り上げてきた経緯があって、その研究姿勢には着実なものがある。このような景観アセスメントは、環境とその認知心理との関係性をどのような枠組みと方向で結合するかという問題を提起するのであるが、「景観認知 (landscape cognition)」, 「景観知覚 (landscape perception)」という用語は新しい開拓地として今後なお研究の積み重ねを必要としている¹⁾。

我が国には、古代における「万葉集」の抒情歌の詩、例えば、「近江の湖（うみ）夕波千鳥 汝（な）が泣けば 心もしぬに 古昔（いにしえ）おもほゆ（柿本人麿，万葉集，卷三・二六六）」のように、詩的な自然風景描写が多くみられる。また、近代の「葛飾北斎」の「富嶽三十六景」は、遠・近の視線に配慮した景観絵画の典型であり、作家北斎の認知心理を知るよすが（縁）となっている。さらに、オランダでは、1660年ごろの絵画とされるフェルメールによる「デルフト眺望」は、人間の営為を写し出している都市景観図として、静けさを漂わせる風景画 (landscape) そのものであり、そのカメラアングルに魅せられる程である。

景観に係わる認知心理学の課題とは、正にゲシュタルト心理学者 K. Lewin の示した図式、 $B=f(P \cdot E)$ が基本的な意味・方向・枠であるように思われる。何故ならば、「P（人間）」も「E（環境）」も「B（行動）」もモジュール性 (modularity) の強い構造と、したがって、機能と力動をもつ心の過程に関与する (f) と考えられるからである。つまり、心の過程には、感覚，知覚，知識，言語，表象，計算，象徴，知能，推理，思考，想像，感情，創造，記憶，神経生理などの構造と機能が、力動的な複雑性を示して、変幻自在なものが現われるからである。それにしても、われわれが最も見たい景観とは何だろうか。

ところで、環境や空間そして場所を欠いては認知心理学は成立しがたいように、その空間的特徴を形づくっているもの、視知覚対象の具体物の一つとしての「文化財」は、景観問題

の1つの中心をなしていると言うべきであろう。文化財は、それが存在する場所によっては都市景観のアクセントになり^{16,19,23,24)}、町並みに自然に溶け込んで、その周辺をも含めて、歴史的な環境および景観を形成しているものが多く、人々の営みの形成物そのものと言える認知対象である。認知対象である景観には、歴史的景観、文化的雰囲気醸し出す重要な役割があるが、視的刺激の提供する癒し空間としてのアフォード性・供給性 (Affordance) の役割もあって人々を認知心理学的法則へと誘導する効果がある。この点も景観アセスメントの経過的な評価として「事情を考慮に入れた (sache-immanente)」い所であると筆者は考える。

要は、文化財が、地域の環境・景観の中で、どのようなウェイト (重み) を担っているかを把握しておくことは、環境アセスメントの実践上重要であることに気づくのである。景観に不可欠な認知資源としての文化財の意味を考察する必要がある。それは、現地調査によって肌で感じ取るものであるという記述に一致する¹⁷⁻¹⁹⁾。筆者は、いくつかの環境アセスメント¹⁷⁻¹⁹⁾ を体験して、肌で感じる地域イメージとは、認知心理学的な「問題解決」にアプローチすることを余儀なくされるものであると思う。なぜならば、視知覚心理学 (visual perception) と密接に係わりがある景観評価は、人々にもたらす効果の大きさや質など様々で、脳つきの眼という知覚や生理、生活経験、価値観による効果を内蔵しているから、実に微妙に変わりゆく心理法則を掴み、心理法則を説明することが、認知心理学の課題であろう。

景観の破壊、主として美観の破壊は、生活環境の秩序ある空間の混乱化をきたすことになる。景観破壊に因んで、国立のマンション訴訟で建設計画の変更は、裁判所命令で波紋を広げている。滋賀県の豊郷小学校の取り壊し問題は住民の景観への愛着感情に係わる景観保全問題を提起している。見直されるべきは、「日常景観」利益であると断じられている。住民利益と景観のメンテナンスを結ぶ問題が発生している (松原隆一郎 2003/4/4/。読売新聞; 見直される「日常景観」利益)。したがって、そこには、生活機能としての景観機能という問題が持ち上がってくる。例えば、そこに住む住民の生活の快適性という一つの視点から捉えられる。都市景観が一定の快適さを創り出しているとき、われわれの生活は情緒的安定感が得られるものである。また、視覚環境についての視的アイデンティティがあること、つまり、長年にわたって培ってきた愛着は、そこに住む人間の主体性を支える体験的感性であると考えてよい。例えば、わが体験的回想をするならば、高校時代の応援歌にあった「前に聳ゆる風師山、嶺より高き理想もて……」は、関門海峡の風景が精神的背景を築く認知資源であったという「想起」に係わることになるのである。これは認知心理学的な一つの実在 (reality) であるとわきまえる必要があるように思われる。一方、風景は、居住者ばかりでなく旅人にも引き継ぐ歴史的連続性を持つ、「なつかしさ」という複雑な感情効果を育むことも周知の事実である。その風景が、錯覚的なものであるかもしれないもの (illusoriness) としても、実にそれが実在 (Reality) しているという意味深い人間の認知心理を認めないわけにはゆかないのである。

1-2. 景観の分類と景観三角形理論

景観の分類をすると、(1)自然環境、(2)人工環境の2つがあるとされる。この2つにまたがる景観の質と機能を検討することが課題となる。景観の質は、建築物をはじめ構造物（街路）が、自然要素（地形、水、樹木、岩石など）との係わりによって創り出されたり排除されたりするものであって、個人の感性にしたがって感知され（認知心理）、鑑賞の対象とされるものであり（美学）、したがって、景観の構成要素間（オープンスペース、案内掲示、標識など）の効果が現われてくるのが景観の質である。これら2つの景観は、人間の認知心理・マインドが交錯していることは既に述べた通りである。その景観心理学をいかに洗練・ソフィスティケートを進めるかということは大きな問題である。

筆者は、景観三角形理論を基礎に景観の心理学を展開したいと考えている。市民の景観美の意識涵養を図ることは、景観アセスメントと結び付いていると考える。景観三角形理論は、図1の通りである。すなわち、(1)人間の感性を中核にして、これを取り巻く(2)自然環境と(3)社会生活と(4)伝統・文化という4要素が、景観問題の解決に不可欠だと考えられる。4要素とは、図1の通り図示されるが、4つの目的が力動的に働くように日常生活に生かされる必要がある。

- (1) 人間・個性を中核にして、景観意識の涵養のための4つの構成要素を考える。
- (2) 「自然や環境」との係わりを持つ人間・個性を重視する暮らしとは何か、「感性」を考える。
- (3) 伝統と文化を尊重する心、歴史性と国際性の涵養、人間への「信頼」を考える。

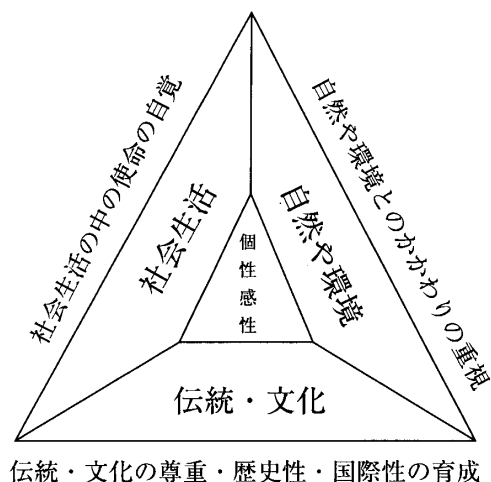


図1 景観三角形理論

- (4) 社会生活の中の「使命」の自覚，社会形成に主体的に参加する道德心，自律心，公共心の育成を考える。

2. 風景とは何か

小林一茶の「古池や 蛙 飛び込む 水の音」は，人工庭園の中において，いかにも静寂が漂っているという感じのする俳句であり，人間の求めている「心地よさ」の原理を射止めているようであり，環境アセスメントにおける快適科学の粋を表現した原点をなすものであり，認知心理学的体験がいかに秘められていたのだろうかと問いたくなるばかりである。これが心の過程を探究する認知心理学の真髄であるように思われる。

松尾芭蕉の「閑けさや 岩にしみ入る 蟬の声」は，自然風景における旅人の詩心を表現しているが，その風情がいろいろと場面（Scene）を変えて筆者の目前に現われ，内心の変化が起こるのである。世阿弥の言葉「目前心後」という能楽の心が伝わってくる思いである。小林にしても，松尾にしても，静閑な庭園や山野を言語や絵図に見立てている所，実に景観アセスメントと人間感性の照査そのものであると思われる。

照査をさらに先鋭化しているように思われるのが，リルケの「ドウイの悲歌（Duineser Elegie）」である。この悲歌は，長い詩歌であるが，人間が委託されていることを使命とする自然愛護の精神が歌われている。その詩歌には，受託者としての風景賛美をすること，そして，風景の委託を文化として，絵画に表現することが，リルケの精神として込められている。

ミュンスター大学に留学して，一緒に研究したスタッフの一人，H. Crabus 先生との対話からよく知ることができた詩人リルケは，ヴォルプスヴェーデ（アウトバーンも少なく自然の多い北方ドイツの芸術村）に一時滞在し，ヴォルプスヴェーデの知名度を高めたとされるが，リルケの意外な詩心を知ることができた。19世紀から20世紀にかけてのユーゲントシュティール／アールヌーヴォーの印象派，後期印象派に通じる「白樺派」の風景画と呼ぶにふさわしい，自然と人工の間をいくような庭園のイメージの絵画が，フォーゲラーの持ち味である。フォーゲラーもヴォルプスヴェーデを愛した一人であるが，庭園の意義を説いた人であった。リルケのいう「委託されている」とは，「人間の心」を指していて，風景の生情の中に現われる自然の構想力を，人間の文化の構想力に転生させることを指す。それがリルケの「風景の心」とであるとされる。大地の生情が人間の委託を通じて現われる自然と文化の共生・再生こそが大切であるというのが，リルケの思想であった²⁵⁾。

3. ゲシュタルトとアフォーダンス

風景とは、眼に見える眺め・眺望のことである。それはよい景観ということである。認知心理学は、1967年になって、心理学の分野で語られるようになった。「認知」に関する近代ヨーロッパの考察は、哲学において語られてきた。ルネッサンスの最終期の Decarts, Spinoza, イギリス経験論系の Lock, Newton, Birkley, Hume, ドイツ知覚論系では, Leibnitz, Helmholtz, Wundt, そして、現代のゲシュタルト心理学を立ち上げた, Wertheimer に続いた, Koffka, Metzger, イタリアの Kanizsa, さらには、現代アメリカの認知心理学の基礎を築いた Marr, Gibson, イギリスの錯視心理学の Gregory, アメリカの Hoffman につながっている。このような認識論の中でも, Katz の図地の認識論は、景観問題の説明に大きな役割と踏み台となり、ゲシュタルト法則の平面知覚から立体知覚へのステップとなり、認知科学を生み出す一因となった。

都市の風貌を描いているのは、フェルメールであったが、それが都市ゲシュタルトと言われるもので、その背後には、2つの印象体験があることに注目する必要があるとされる。その一つが、「風景体験が面影として宿されていること」である。その二つは、人間の営みの歴史的事実の蓄積が風景を作り上げていることである。蓄積とは、経済、伝統、宗教、文化、動機などである。都市風貌学 (Stadt-Physiognomik) は、こんにちでは余り語られないが、人の観相学に匹敵するもので顔の認知心理学であるから、都市風貌学の研究もまた興味深いものがある。

ゲシュタルト理論では、知覚の体制化の法則を打ち出している。類同の要因、よい形態の要因などのゲシュタルト法則が形態知覚・色彩認知に役立っていると強調されている⁴⁾。例えば、錯視など視覚の意識についての脳内内在性を考察する知覚・認知の伝統派で、認識現象を感覚・知覚における結合法則によって、刺激の間接知覚論を展開・説明しようとしている。これに対して、近年、知覚・認知は、外部の環境自体にあると説くギブソニアンたちの認知派であって、認知的外在派であると指摘することができる。ギブソニアンは、認知革命の後も盛んに学説を展開した。すなわち、有機体と環境は、相補的に機能している関係にあるとし、進化した知覚と行為システムによって環境は動物に行為する機会をアフォードすると説く。アフォーダンスとは、動物と環境の適合を意味する用語であって、動物と環境の関係性を表している言葉である。現代知覚論におけるギブソニアンたちは、外環境の刺激図「きめ (texture)」が、脳内機構によるというよりも外環境に存在するとして、「きめ」刺激を直接知覚によって人間は取り入れているという、視覚生態学的な直接知覚論を主張する。

ゲシュタルトとアフォーダンスは、現代における感覚・知覚・認知・認識に係わる内在論

と外在論の代表である。よい景観とは何かを議論するときの問題解決を示唆する研究テーマが内蔵されている。

「ゲシュタルト」と「アフォーダンス」の2つの概念は、見る側の人間の視点と見られる風景を見るという視点とが、独立的にまた相補的に存在しているという示唆を与える重要な研究テーマである。

4. 景観と視覚心理学

筆者は、もっぱら視知覚の実験的基礎研究に携わることを意図してきた。景観という問題は、広島県環境計画協会の環境アセスメント作業に従事することから、次第に関心を深めることになった。実際にここ三十数年の間具体的に施設や山野をめぐり視察した。そうした風景を目前にして、視覚心理学的現象がどのような意味があるかが、景観アセスメントの中核をなすものであることも認識した。その上で、自然環境と人工環境が織りなす中の風物詩が人間心理としていかなる効果をもつかを考えるようになった。

視知覚論における「脳つきの眼」の構造と機能が、目前の対象をいかに解釈し、日常の生活感や行動にいかに役立っているか、また、その測定評価をすることを景観アセスメントに役立てることを目標としてきた。なぜならば、景観とは、人間の「脳つきの眼」に投映される視的空間の状況を示す言葉だからである。景観とは、人間の視覚を通して獲得された環境の姿・形であり、言わば、人間の脳裏に浮かぶ心的現象であるからである。主体である「ヒト」と物的構成要素の「モノ」が含まれる環境、そしてこれら環境要素間の相互作用関係も景観に効果を示す要因と考える広い概念の中で、「環境」を扱うことが認知心理学からみて妥当であると考えからである⁵⁾。

視対象知覚には、必ず視点がなければならない。その視点場は、われわれが着目している一定の範囲のことで、絶えず動いているから、視覚心理学の法則が、景観の問題に関与することになると考えられる。例えば、見かけの大きさ、観察距離、視対象間の距離、遠近感、単純な平面的知覚であるが、絶えず動いている主体の対象の捉え方は、複雑で立体的かつ運動視や色彩視が寄与することになるから、複雑な視知覚論が必要である。特に、ゲシュタルト心理学の提出した「図地」の知覚論では、図を明確に浮き上がらせる地との相互作用によるものであることから、対比現象が景観に作用すると指摘している。大きさの対比、色彩対比、そして、視対象を照らす光の量、明るさや明度は、ものの見え方に重要な効果を示すことから、景観が、視覚心理学的に心地よい情感をもたらす配置条件をもっているかが考察の対象となる。それが「よい景観」のあり方を探究する重要な手掛かりとなるものである。

よい景観には、見かけの良さがあると考えられる。その環境の中に存在する市街地の看板

や河川の流れとしての水量は、しばしば図として認識され、場違いなもの、不調和なもの、目立つもの、対比されるものとなって、われわれの目をひき、認知資源となっているものがある。よい景観は、人間の精神安定剤の役割を担っていてもいいわけで、日本三景の宮島の鳥居風景は、色彩的にも形態的にも、また、立体空間視的にも情趣をかき立てるよい景観の認知資源となっている。われわれ人間は、その景観のもつ認知的情報や認知経験を通して、自我を景観の中に投入したり、感情移入をしたりしている。心地よさが認知されなければ、図地としての景観が望ましくないものとして、われわれは環境の姿・形への感情移入を拒絶することになるのではなかろうか。宮島の大鳥居は、見せるための演出が、視覚心理学的にデザインされているだけでなく、精神的な意味を引き立てる視界の中に創り出されているとみなされ、ある種の癒し空間となっている。この空間は、美術館のもつ空間性と原理的には類似する癒し空間でもあるとみなしてよいと思われる¹³⁾。つまり、人間の意識、健康、元気回復に役立つものとしての視覚的アイデンティティをもつ風景がよい景観と言えるのであろう。したがって、よい景観を創案することが、景観アセスメントの評価目標とみなされるのであろう。

広島修道大学の正門前に立つとき、「イチョウ並木」が目前に奥行きのある空間感覚を呼び覚ます。その景観は、これから大学の教育・研究活動なり、クラブ活動なりをする気概を沸き立たせるものとなるのかもしれない。景観にまつわる意味が、このような門前の眺望から、現代学生諸氏に何らかの心的なものをもたらすと思われるが、その情感を呼び起こすものが何であるかという問いが、「景観心理学」であろう。このイチョウ並木の途中に「茅と藤の花壇」があつて、それがイチョウ並木の連続的な奥行き感を中断する格好になっている。「カヤ」の植生が美しい。その中断の景観は、対象を構成する植生の木々やその質感、立ち木の形状とあり方、藤棚、庭木の花々、ハーモニーロードの道標、路面の石などのモノ自体のデザイン、さらに、それらがどのような場所にあるか、どこからわれわれは「そのイチョウ並木」を見るのか、路上の視点移動と視野の変化によって、よい景観の印象度が異なってくる。人手の加え方次第（周囲のさつきの木や清掃状態など）では、いろいろな情趣が違った見え方になってくるのである。人間は、一定の視点だけをもっているのではなく、視線を動かしながら、視野を拡大収縮しながら、路上空間の中を移動しながら、環境についての知識を深めようとしている。イチョウ並木道、すなわち、ハーモニーロードは、広島修道大学の運動場、教室、図書館、食堂、事務局などの「本丸」のもつイメージと印象を誘導しながら、あるいは連想させながら、誘発特性（Valence）を創出していると思われる。そのイチョウ並木道は、筆者には神社の表参道を思わせる不思議な細長い空間を連想させる。表参道の奥には大学の学術・文化の景観が広がる鎮守の森の社になぞらえる学びの舎が発見できる道である。その道すがらいつも想像活動の場になるのである。大学の知的空間が「教育の森」になぞら

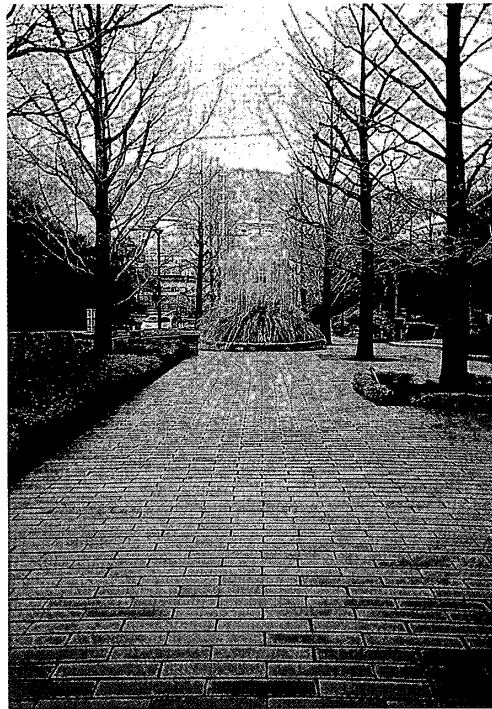


写真1 広島修道大学ハーモニーロード

えられるように、「イチョウ並木道」の景観の連続は、学習の森への正に通路であった（写真1）。その体験を日々重ねつつ、イチョウ並木道の季節的演出方法の享受だけでなく、イチョウ並木道の雪月花を愛でることもまた環境影響評価を考える一つの手立てである。

5. 景観と絵画

ドイツの画家デューラーの水彩画は、アルプス越えのときに描いたものと思われる、「トレント（北イタリア・トレント州の州都）」の城郭が美しい³⁾。ドイツは中欧大陸の森の国である。「ドイツ景観論の生成—フンボルト Frankfurt/Main, Weisbecker Verlag, 1985; Die Entstehung der deutschen Landschaftslehre.²¹⁾」という著作には、ゲシュタルト的「全体」としての「景観」について、いかにもドイツ的な記述がある。ドイツのロマン派の自然観が示されている。フンボルトの意図する景観の「全体印象」の把握は、景観の美的・情緒的理解あるいは知覚像であって、現代の景観生態学などと言われる景観の「全体性格 (totalcharakter)」と混同されるべきでないと警告した。実際のところ、景観の全体性格は、見る主体の側の何らかの体制化（ゲシュタルト化）の作業を伴わないかぎり、把握されないものであるかもしれないのである。科学的な思考法を景観の全体性格に取り入れて行かなければ、景観の芸術的な側面を評価しがたいのではないかと思われる。今日の科学と芸術の融合は、景観評価の

重要な切り口であると思われる。その研究開発が今求められてきたのではあるまいか。例えば、「建築・都市計画のための空間計画学」¹¹⁾と「都市景観を読む」²²⁾の2つは、景観絵図に係わる視野、視点場の概念、視認距離の議論を取り入れた科学的研究として興味深いものがある。このような印象派の絵画と現場との結合的考察は、むしろ葛飾北斎（富嶽三十六景）や安藤広重（東海道五十三次）の絵図に見い出せる視点場と対比して、そこに淵源があると思われる。「自然景観と人工景観の保護」¹⁾という思想を我が国の先人たちが持ち合わせていたのではないかと思う程である。

6. 地域イメージ

1) データ分析

地域イメージ調査においては、統計手法を使用して多数のサンプル（標本）を分類して、その特徴を明確化する分析が実行される⁶⁾。ここでは、地域イメージの調査に関して、経済生活、社会生活、自然との触れ合いなどについての回答から、サンプルの類型化を試み、その地域に住む住民や外部の人々がもつ意識状態や選好度について考察する。その場合に因子分析およびクラスター分析の方法を活用すると、人々の地域イメージあるいは意識状態の類型化からグループ分けすることができる。意味微分法（SD法）は、形容詞対を用いた（例えば、明るい—暗い）イメージ表現の分析法である。

2) 計画地域の現状分析

近年、地域社会、近隣社会、地域共生社会¹⁾、地域共同社会、コミュニティ²⁾ということばが、多用されるようになったが、地域社会の住民は、さまざまな日常生活における各領域の機能が、相互依存的な体系をなすことを期待し、それにともなって、住民間の理解と人間的触れ合いという地域社会の活動が促進され、地域イメージの強化に寄与するものを求めている。「コミュニティは実在する」ものである³⁾が、その地域イメージとは、どのようなことを意味しているのであろうか。「イメージ」は、心理学の知覚と行動の成立に寄与する用語として使用される以上に、現代ではいろいろな分野で使用され、地理学をはじめ都市工学などの分野でも、人々が思い描く心的内容の共通性が何であるかを示すための基本概念となっている。具体的には、ある都市や農山漁村の地域イメージを形成する要素を抽出することによって、その地域の近代化の過程とか市街化の在り方、交通の利便性などについての評価を行い、地域社会の活性化、固定イメージの打破など種々の施策の計画立案をはかり⁴⁾、マスタープランの手掛かりやデータを得ること⁵⁾を意図している。

「国民生活指標（People Life Indicators, PLI）^{12,14)}は、生活場面を「住む」、「着る」、「食べ

る」、「働く」、「育てる」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「治す」、「交わる」、「買う」、「移動する」、「伝える」の活動領域を挙げている⁶⁾。この活動領域における生活水準を、「安全・安心」、「公正」、「自由」、「快適」の評価軸を設定している。この「PLI」の階層構造的な測定は、国民生活選好調査による重みづけがなされた指標として使用されることがある。

例えば、快適性には、コンフォートとプレザントネスがある²⁾。前者は、不快でないことをいい、不快指数ということばがあるように、温度と気温の組合せによって不快にならないような状態を保つエアコンをきかした室内がその例である。一方、後者は、環境から積極的に快感が得られる状態である。つまり、外気と体温との相対的關係による場合であって、温泉の露天風呂で得られる快感がよい例である。

一般に、快適環境の構成要素としては、緑の豊かさ、空気の爽やかさ、自然環境の身近さ、静けさ、町並み、文化的雰囲気、きれいな水環境、道路・空気の清潔さ、を掲げて環境整備の指針とされている。コンフォートは、「古池や蛙飛び込む水の音（小林一茶）」や「閑かさや岩にしみ入る蝉の声（松尾芭蕉）」に象徴されるものであるが、温熱環境、音環境、視覚環境、空気・におい環境、振動環境、気圧環境、触・圧環境等各モダリティに対応する環境特性であって、空調設定値の決定や騒音公害の範囲の設定などの環境条件整備を進めるときの人間工学データに基づく科学的な実践に役立つものである。

したがって、人間の環境に対する経験は、極めて複合的なものであって、その経験は時系列的展開の中であって、絶えず変化している感覚体験であるから、快適性とは人間の環境体験が時間的推移の中で表現されるという新しい方向づけが検討されるようになった。つまり、「回復させる環境」という概念がそれである。この回復させる環境とは、自然環境との接触がリラクゼーションやレクリエーションの手段として日常的に利用されるという経験的事実にもとづいているものであって、実に心理学的説明の試みである。実際に、地域社会の教育・文化環境に寄与する美術館にも「回復させる環境^{10, 13)}」としての存立理由があるように⁷⁾、人間性に満ちた環境には「ほっとする、居心地のよい、面白い、楽しい」質感が存在するものである。「クールなアメニティ」に対する「あったかいアメニティ」を対置して環境の質を考えることもできるから、住民にとっての環境の質あるいは意味的環境を探ることも必要である。

人間の感覚特性としての質感あるいはクオリアは、感触とか膚ざわり、手ごたえなど人間特有のイメージや感性が研究課題でもある。地域イメージは、全体的なものであれ個別的なものであれ、個別的なものの集合したものであれ、人間性豊かな環境がどのようにできているか、また、地域イメージが人間性豊かな環境とどのような状態にあるものであるかをみていく必要がある。

生活場面は、経済生活、家庭生活、社会生活から構成されている。経済生活は、所得生活と消費生活に分けていて、労働環境の成熟度が指標に取り上げられたりする。消費生活につ

いては、消費水準の高低度、商店街の賑わい度、ショッピングの便利度、物価指数の高低度、消費生活のゆとり度が指標化されることになる。

地域づくりに地域イメージは重要な要素とみなされる。したがって、地域の基礎的資源を成す地域イメージは、地域の開発に重要な意味をもっているだけでなく、大切な課題でもある。「暮らしの豊かさは西側先進国並か⁶⁾」、「西側先進国と比べて、日本のほうがより満たされているか⁶⁾」の選好度調査は、国民の意識を問題にしたものである。

3) 予 測 作 業

地域イメージは、地域がどのような現状であるか、また将来においてどのようなになっているか、という地域住民生活や街の姿を抽象的に表現しようとしたものであるが、一方では、その現状と未来像とを具体的に示す必要がある。個性的な地域社会の魅力は何であるのか、地域社会が備えるべきものとは何かを明らかにする必要がある。例えば、安全性、快適性、協働性、文化性、福祉性、交通性、自然環境についての視点から、将来像をイメージして地域づくりのための地域ビジョンの要素をいかに結び付けるか、その設定を具体化する必要がある⁸⁾。

4) 評 価 作 業

「家族」を切り口に国民のライフスタイルの検討⁹⁾が行われているが、地域の自然環境を基盤にした住民の経済生活、家庭生活、社会生活を、網羅するような検討が必要である。地域イメージは、要は地域づくりに帰結するものと考えられる。地域イメージの形成は、自然風土（山河・景観、気候など）、歴史的所産（遺産、物語、歴史、地誌など）、住民の暮らし方（物産、仕事、生活、イベント、福祉、祭りなど）が、地域づくり、あるいは、地域計画の将来像のための重要な基本要素である。住民意識を高揚させるものが、地域づくりの中に存在することが焦眉的であろう。

5) 景観の分析・予測・評価

景観とは、自然を含む観察対象の全体的な眺望を基にした人間の心理現象をさしている。したがって、視知覚の特性や環境対象それ自体がもつ特徴、観察対象間の位置的な関係性、観察者の視点や視線の在り方によって、景観はいろいろな見え方を現すものである。そこで、川の流れと山村の眺めの場合、「図と地」の特性概念によって¹⁾、複雑な全体的な空間²⁾と景観の構造調整をすることがある。

6) 景観の評価

景観の評価は、客観的な方法を駆使した評価手法を用いることが重要であるが、そのため

には、評価者が誰か、評価対象は何か、どのような観点による評価かその評項目や尺度は何か、そして評価結果の測定法と分析法は何であるかという課題がある。

7) 景観の評価手法

景観評価の手法にはいくつかの手法があるが、計量心理学手法がよく用いられる。なかでも、意味微分法（SD 法；Semantic Differential 法）による因子分析がある。一般に、多変量解析は、クラスター分析なども多用されているが、数個の因子を抽出してどのような意味があるのかを説明する寄与率の算出が行われるのが、因子分析法である。SD 法は、景観評価の視覚的評価というよりも、意味的評価であり、地域のイメージ・個性を尺度化する。しかし、人間の生活感覚としての住みやすさ・居心地のよさ、利便性など行動心理学や身体感覚的評価が必要であるから、景観評価には、 $P=f(P \cdot F)$ という図式にしたがって、P（人間）側面、E（環境）側面、B（行動）側面と3側面の結合 f（関数関係）について、評価することが肝心である。「感性評価の階層構造に関する一考察（仁科健，永田雅典，前田真由実，1998，人間工学，第34巻特別号，258-259）」では、物理量—質感—イメージ—総合評価の階層構造があつて、総合評価のパターンを異にする現象を生む評価メカニズムの存在が示唆されている。ここでは、15対の質感形容詞対が使用されているが、視覚感性評価について個人差が生じる構造を考慮に入れる必要があることを示している。言語による認知内容の表現法の研究は、ますます普及させていく必要がある。

8) 景観評価の目的

第1，人間の視知覚の特性に基づいた視知覚対象の見え方の視覚評価，第2は，住民の生活行動空間としての住みやすさなどの生活観評価，第3は，地域の風景が持つイメージや意味づけ，社会心理学的・文化心理学的な評価というような評価領域があつて³⁾，それぞれ評価の要因と評価構造を明らかにすることが課題である。住民の景観美への関心と景観評価の態度涵養をいかに展開するかが大切な課題となる。

7. 環境と認知心理

1) 生老病死

火葬場の設置は，近年の高齢化社会ではある種の緊急性の高い課題の一つかもしれない。人間は生を得れば，死を迎える存在である。生老病死は，人々のマインドとハートから離れることはない。死の覚悟ができているかどうかは人さまざまでして，死は人間の宿命である。その死をいかに語り合うか，「死にゆく人々のケア」もまた大切な認知心理に係わることで

らである。われわれは死と向き合うとき、残された家族の思いが深くなることに気づくものである。というわけで、われわれが死そのものを考えるということ、患者や医師の死についての体験を聞くということ、安楽死の問題、死と宗教との関係、看護と死、患者の死後の家族の問題、自然条件、道路アクセス問題、設計としての景観問題など、いくつかの検討すべきケースがあると思われる。中でも、火葬場の出来事は残った家族や援助者の思いやりが大切になるとされる¹⁵⁾。

火葬場についてのイメージは、古来、日本の社会ではマイナス面が取りざたされ、先の大戦直後における筆者の青年時代の経験では、火葬場の近辺に住む人々の生活のあり方を思い起こすにつけ、人間性への配慮の必要性を痛感しなければならなかったことが回想される。自らの教員生活による大事な経験を心に刻んだ忘れ難い人々への深い印象は、わが心から消え去ることがなく、哀感を覚える。「人生至るところに青山あり」とは、墓地はどこにでもあることを意味している。一般に墓地は山野の静かな場所が選ばれてきたという、われわれ日本人の風習のようなものもあって、星を見上げる心境とは違っていることを今の日本人は思い抱いているように感じる。

広島市は、火葬場を沼田町に新設したいという意向を町民に伝えている。この火葬場の新設をめぐる問題が浮上し、町内会では回覧が回り、町民の賛否両論が起り、その問題の先送りという認知が町民の中にできていると思われる。では、いつ、どこに、なぜ沼田に、そして、どのような設計で等、いろいろな思惑と予感が沼田町民の中にわきあがっている。それもまた自然な感情であると思われる。しかし、どのように火葬場と市民が向き合うべきか、町民として市民としての気持を整理する必要があるのだろう。火葬場は言わば死の過程への参画であることを、目前にするとところであるから、人が死にゆく心理を推察し、死別をそこに集うものすべての人々が深く思い合う最後の希望の場所であることを、残るわれわれは認知する必要があると思われる。その火葬場をどうするかは、市民のマインドとハートを考慮に入れた総意としてまとめることにあると思われる。火葬場に係る環境アセスメントは市民のイメージと深く係わる調査結果を基本とする必要があろう。

2) 伝統と文化と社会生活

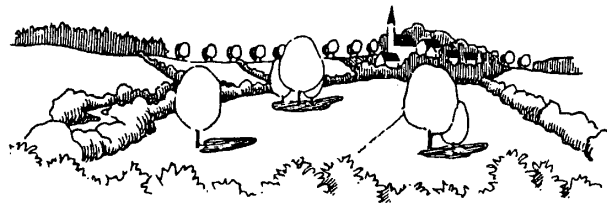
神社の表参道は、日本の原風景とも言えるものである。宮島の大鳥居、バチカン教会などの景観は人々の心に内面化された環境となって印象深く人々の心底にあって、精神的・文化的な意味が強調されている。これがいわゆる原風景というものであろう。原風景は、社会集団や民族にとってのかけがえのないものであるが、主観的な存在として他者の共感できない不思議な景観をよびおこすものである。そこには人々の社会生活を律するほどの現実感をきかしている。歴史的遺産であるから、その地域のイメージづくりに寄与しており、精神文化

の原点となる力をもっている。昔から「極楽浄土」,「エデンの園」,「蓬來山」,「桃源郷」,「竜宮」,「ユートピア」,「アルカディア」などの名称は,古代の伝説・神話の物語などが色濃く反映されていて,名所や絶景の発祥地となっている。白砂青松の風景が,山陰の地・わが故里・親元の家从目前から消失した海浜は見るに無残であり,美辞麗句・白砂青松の体験的喪失感に打ちひしがれてしまったのである^{7, 8)}。

3) よい景観の街のために——日本人は都市風景についてどう考えているのか——

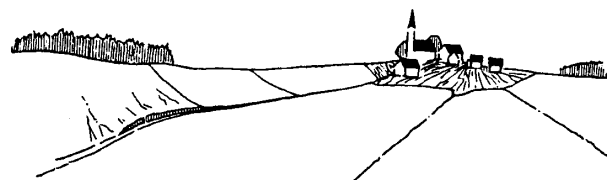
「わが街は美しく! : UNSER DORF SOLL SCHÖNER WERDEN!」という3000人以下の小村の景観美のドイツ・ヴェストファーレン州国土省の景観を競う運動(Wettbeberbung)の一環をなすものである。当時の西ドイツの小村・Schmalenbergを訪ねた時の報告書に,街の様子を記述している(混住化する農村の開発構想とコミュニティの役割に関する研究(総合開発機構, 特定研究 NRF-75-48 北山正文, 安藤忠男, 赤星光路, 高木敬雄, 大西充, 西山宏, 菅原辰幸と共著)。その時以来, 景観の研究資料を求め, 村の景観計画(Landschaftsrahmenplan)の仕方を考察してきた。

古典的であるが, いかに大陸森林国・ドイツという印象の考え方がその図録から読み取れる。その例示をすれば, 図2に示す通りで, 部分の集合以上の全体性の印象を重んじるド



Das Dorf gehört zur Landschaft

Der Ort verwächst mit der Landschaft. Eine Allee entlang der Straße bindet das Dorf in den vorhandenen Wald ein. Windschutzstreifen, in Talrichtung geführt (Kaltluftabfluß), gliedern die Fluren. Der Wasserlauf ist durch Uferbewuchs geschützt. Der Ort selbst ist durchgrünt und mit einer Baumkulisse umgeben.



Dorf und freie Landschaft sind unterbrochen

Dieses Dorf liegt zwar an der richtigen Stelle in der Landschaft, aber eine Verbindung mit dieser durch Baum und Strauch besteht nicht.

図2 よい景観の例(ドイツの場合)

イツの「ゲシュタルト好み」がはっきり見えるのである。現代日本では、景観・各論として、自然景観、田園景観、山岳景観、森林景観、漁村景観、農村景観、リゾート景観、都市景観、街並み景観、広場の景観、都市公園の景観、盛り場の景観、夜景、道路景観、街路景観、河川景観、海岸景観、港湾景観、橋梁景観、高層建築の景観、ダム景観、富士の景観、神社参道の景観、白砂青松の景観、日本三景などがいろいろな考察がなされているが、美観を誘う風景には、自然を借景にした庭園景観が数多くある。都市の美観についてはなお我が国では研究・開発の余地があると言わねばならない。それは、環境美学への一つであるかもしれないと考える²⁹⁾。

知覚の風土的意味を論じた後、種村（1995）は、知覚の「美的芸術的意味」について触れている。人間の知覚は、事物以外に事物が存在する環境の中の事物をとらえる。これがゲシュタルト派の図地体制化論である。事物の知覚の中に特有の環境因子が反映しているだけでなく、人間自身が環境の中で知覚し、環境に作用されて知覚している。環境によって育てられた身体感覚によって環境を知覚しているのである。その環境とは自然的物理的存在であるばかりか、人間の生活活動、政治経済活動、文化芸術活動などによって創造され加工された、人工文化的な世界を含んでいる。この自然的、生態的、歴史的、社会的、伝統的、文化的な特性をもった全体としての環境を、和辻哲郎の言葉を引用すれば、それが「風土」と言うこともできるかもしれない。「風土——その人間的考察——」には今も魅力的なものがある。しかしながら、現代における「都会的風土」は、「凸凹のある建築の高層化」や「日常景観の見直し論」があり、また、ニューヨーク・マンハッタンに似た都市の趣きがあり、そこには肯定的なもの否定的なものが混在している。それがわれわれの都市風景の知覚であるとするれば、日本人の市街化認知や環境の知覚的意味とは何か考察する必要があるのではなかろうか。例えば、「日本人は建築についてどう考えているか」という問いに答えて、黒川紀章（2003、読売新聞5月9日）は、「デザインだけでなく、構造、設備にもかかわり、すべてを作り上げてこそ、建築に信念を映し出せる。信念は、建築が作る風景に及び、戦後の都市作りの原点になってきた」と記されている。

一般の人が建築に関心を持ち始めたことを歓迎しつつ、「しかし、カジュアルであればよいということではない」。手軽な流行として扱われることの危うさを懸念する。建築家の名前やブランド化する表面的な記事も多い。それは都市のあり方について考え、論議するきっかけにはなりえない。あえてカジュアルを前面に打ち出す建築家も登場している。それを「ユニット派」と呼ばれる若手建築家たちだそう。作家性を排除し、できる限り施主の希望に沿う。軽やかな「普通感覚」が、これまでの建築家のイメージと大きく異なる。その分、どんな建物を作り、どんな街づくりをするか、果たしてポリシーが薄いのだろうか。

参 考 文 献

- 1) 沼田 真 1994 自然保護という思想 岩波新書327 岩波書店／東京
- 2) ハインリッヒ・フォーゲラー展図録 2001 尾道白樺美術館
- 3) Oswald Botz 1925 Albrecht Dürer Landschaft=Aquarelle Wilhelm Andermann Verlag/Leipzig.
- 4) 篠原 修編 2001 景観用語事典 彰国社／東京
- 5) 日本建築学会(編) 2002 建築・都市計画のための空間計画学 井上書院／東京
- 6) 志村重太郎編著 2000 図説住民協働型地域づくりシステム——地域の価値発見と想像を目指して——行政／東京
- 7) 三村浩史 2000 地域共生の都市計画 学芸出版社／東京
- 8) 小川一夫監修 2001 社会心理学用語辞典 コミュニティ(吉森護) 北大路書房／京都
- 9) 杉村芳美 1996 阪神大震災とコミュニティ——記憶され続ける物語 発言者24号 50頁
- 10) 永吉智郁代 南博文 2001 住環境におけるアメニティをめぐる心理学の問題 心理学ワールド12号(社)日本心理学会
- 11) 日本建築学会(編) 2002 建築・都市計画のための空間計画学 井上書院／東京
- 12) 経済企画庁(編) 平成2年版国民生活白書(人にやさしい豊かな社会) 大蔵省印刷局
- 13) Kaplan, S., Bardwell, L.V., Slakter, D.B., 1993 The museum as a restorative environment, Environment and Behavior Vol. 25, No. 6, 725-742.
- 14) 内閣府編 2002 平成13年度国民生活白書——家族の暮らしと構造改革—— 行政／東京
- 15) 柏木哲夫 1978 死にゆく人々のケア：末期患者へのチームアプローチ 医学書院／東京
- 16) 広瀬正孝 門田博知 北山正文 高木敬雄 1977 広島都市交通に関するテクノロジーアセスメント 建設省中国地方建設局／広島
- 17) 北山正文 安藤忠男 赤星光路 大西充 高木敬雄 西山宏 菅原辰幸 1974 混住化する農村の開発構想とコミュニティの役割に関する研究 総合開発機構 特定NRF-75-4B／東京
- 18) 北山正文 安藤忠男 菅原辰幸 福岡義隆 根平邦人 広瀬正孝 堀信行 中井資 長瀬洋一 高木敬雄 玉野和保 寺西靖治 網永肇 佐々木博司 三寺光雄 1980 広島市北——工場環境アセスメントに関する調査研究 広島市環境事業局／広島
- 19) 北山正文 広瀬正孝 佐々木博司 中井資 安藤忠男 玉野和保 根平邦人 鷹村権佐藤立美 堀信行 網永肇 高木敬雄 菅原辰幸 1983 安芸地区広域火葬場施設設備に伴う環境アセスメント報告書 広島県地域環境計画協会／広島
- 20) 鳴海邦碩 1990 景観からまちづくり 学芸出版社／東京
- 21) 山野正彦 1998 ドイツ景観論の生成：フンボルトを中心に 古今書院／東京, Die Entstehung der deutschen Landschaftslehre, Hein, W-H, (Hrsg.), Alexander von Humboldt, 1985 Frankfurt/Main, Weisbecker Verlag.
- 22) 新島哲 2002 都市風景画を読む：19世紀ヨーロッパ印象派の都市景観 九州大学出版／福岡
- 23) 北山正文 中井資 根平邦人 広瀬正孝 安藤忠男 高木敬雄 鷹村権 福岡義隆 佐々木博司 佐藤立美 玉野和保 菅原辰幸 網永肇 1993 広島市新規埋立地建設計画策定に係る環境影響総合評価 広島県環境計画協会
- 24) 北山正文 中井資 佐々木博司 菅原辰幸 根平邦人 広瀬正孝 高木敬雄 安藤忠男 福岡義隆 佐藤立美 玉野和保 1997 安佐南工場周辺の環境と工場の性能について 広島県環境計画協会
- 25) Webb, Karl, Eugen 1978 Rilke und Jugendstil -Affinities, Influences, Adaptations, the University of North Carolina Press/USA；リルケとユーゲントシュティール：世紀末の芸術家たち 1980 伊藤行雄・加藤弘和訳 芸立出版／東京
- 26) 五十嵐敬喜 小川明雄 2003 「都市再生」を思う——建築無制限時代の到来—— 岩波書店／東京
- 27) Ruskin, John 1900 Modern Painters, 5 vols (Edited by George Alen), ジョン・ラスキン著 内藤史朗訳 2002 風景の思想とモラル——近代画家論・風景論—— 法蔵館／京都
- 28) 松原隆一郎 2003 見直される「日常景観」利益 読売新聞4月4日 読売新聞社／東京
- 29) 中村良夫 2003 風景を愉しむ風景を創る：環境美学への道 NHK 人間講座 日本放送出版会／東京

- 30) Landwirtschaftskammer Rheinland, Landwirtschaftskammer Westfalen-Lippe, Zeichnungen und Fotos: D. K. Martin, H. Heine, Kragh, W. Berndt, Druck: Landwirtschaftsverlag GmbH, Hiltrup. Landeswettbewerb · Nordrhein-Westfalen-UNSER DORF SOLL SCHÖNER WERDEN.
- 31) 文化芸術振興基本法（文部科学省設置法）
- 32) 広島県文化財団保護条例（条例第三号）
- 33) ふるさと広島の景観の保全と創造に関する条例（条例第四号）